

2023 年度小倉奨励賞の受賞者決まる

受賞者：伊藤 忠（日本気象予報士会東海支部）

研究題目：Web で得られるデータを駆使したメソ気象現象の調査研究

選定理由：

伊藤 忠氏は、半導体関係の技術開発を本業とするかたわら気象に関する調査を行ってきた。Web 上で入手可能な気象データが限定的であるなか、それらを地図上にプロットして自ら等値線を描くという地道な解析手法を用い、局地的な現象のメカニズム解明に挑戦してきた。退職後はさらに精力的に研究活動を進め、日本気象学会の中部支部研究会や秋季大会等での発表はもとより、近年は台風に伴う降水系の解析結果について、「天気」への調査結果の発表にまでつなげるなど、調査研究が踏むべき一連のプロセスを確実に進めてきた。

調査研究の対象は、濃尾平野の積雪（伊藤 2016）や暖湿気塊の流入に伴う豪雨の事例（伊藤 2018）、伊勢湾周辺で発生した局地的な強風（伊藤 2019）など多岐にわたる。近年は台風に伴う局地的な気象の解析が調査研究の中心となっている。台風接近時に局地的に形成される小低気圧の解析、台風通過時の気温、温位、風の東西－高さ断面上での分布から、風の鉛直シアの状況や、湿りの空間分布の解析が「天気」誌面に報告されている（伊藤 2020a, b, c, 2021）。

いずれも、気象庁や気象事業者などが Web 上で公開している気象データを入手し、フリーハンドで等値線を引いたり、湿りの多い領域を塗りつぶしたりして場の解析をする手法を用いている。この手法で得られた気象学的な知見はもとより、入手できたデータを自分の目でじっくり見て面的分布や 3 次元的構造を俯瞰し、自ら複数要素を重ね合わせて場の解析をするという伊藤氏のスタイルは、とにかく、データをコンピュータに取り込み描画を自動化することに注力しがちな今日にあって、何を解析したくて図を描くのかという目的意識の重要性をあらためて示唆するものである。

上記のほか、伊藤氏は日本気象予報士会においても、東海支部の天気図検討会の講師を継続的に引き受けたり、東海地方の積雪事例の研究に関する記念講演を行ったりと、市井における気象予報技術のレベル向上にも積極的に貢献してきた。こうした取組は、気象研究を本業としない気象学会員にとって大いに参考となるものであり、気象に関する調査研究のすそ野を広げる良い手本となるものである。

以上のことから、伊藤 忠氏に 2023 年度日本気象学会小倉奨励賞を贈呈するものである。

参考文献

1. 伊藤 忠, 2016: 局地解析から見た濃尾平野の積雪—2014 年 12 月 18 日の事例と 2016 年 1 月 25 日の事例比較. 日本気象学会 2016 年

度秋季大会講演予稿集， B211.

2. 伊藤 忠， 2018：暖湿流場における水蒸気供給／降雨バランス揺らぎと周期的局地温度場との共鳴．日本気象学会 2018 年度秋季大会講演予稿集， D457.
3. 伊藤 忠， 2019：どんな予兆に注意すればヨット転覆事故は防げたか—2017 年 4 月 29 日の急な強風の事例について．日本気象学会 2019 年度秋季大会講演予稿集， B303.
4. 伊藤 忠， 2020a：「平成 30 年台風第 21 号」通過時の近畿～中部地方の大気構造と地形が伊勢湾周辺の暴風に及ぼした効果．天気， 67， 255-260.
5. 伊藤 忠， 2020b：「平成 30 年台風第 24 号」に伴って関東地方に発生した副低気圧の形成場．天気， 67， 565-572.
6. 伊藤 忠， 2020c：平成 29 年台風第 21 号に伴って神戸付近に形成された低気圧への中国・四国・近畿地方における大気構造の関与．天気， 67， 695-702.
7. 伊藤 忠， 2021：令和 2 年台風第 10 号に伴って伊勢湾周辺に形成された線状の降水系周辺のメソ気象場．天気， 68， 477-483. .